

保護者の子どもの体力に対する認識についての基礎研究 ～体力測定の子測に着眼して～

Basic research of parental recognition for physical fitness of children To focus to prediction of physical fitness measurement of children

山田 悟 史

1. はじめに
2. 方法
3. 「保護者の予測」と「実際の測地結果」の平均値の差
4. 全国平均との比較
5. 相関
6. 結果
7. まとめ

1. はじめに

日本人の体力低下が言われるようになって久しい。毎年、体育の日の近くには子どもの体力の低下が取り上げられている。近年の子ども（6～10歳頃）の体力をみると1985年ころを境に低下の一途で、最近では下げ止まりと言われている状況である。昨年(2016年)では、ボール投げの成績が特に低い結果となっている。体力の低下と書いたが、問題は体力が低下していることではない。子供の生活スタイルの変化があり、その結果の一つとして体力の低下が表れているのであって、体力だけが大きな問題とされているわけではない。その生活スタイルの変化は認知能力の発達にも影響しており、さらには情緒や社会性、意欲といった非認知能力の発達にも影響している。つまり子どもの全般的な発育発達に影響していることが問題なのである。その生活スタイルの変化とは「運動遊び」の減少であり、そのわかりやすい代表例として「体力」なのである。

子どもの体力低下については1990年ころから警鐘が鳴らされ、幼稚園や保育園においては少なくとも数の園が「運動」や「体育」、「スポーツ」に取り組んできた。そして2012年々に文部科学省幼児期運動指針策定委員会『幼

児期運動指針』が全国の幼稚園・保育園に通知され、全国の幼稚園教諭および保育士には「運動遊び」の重要性が認知されるようになり、幼稚園・保育園での「運動遊び」の導入は本格化してきている。この幼児期運動指針で文科省の策定委員会は「幼児は様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが大切である」としている。その中で体力は運動遊びにおいて支えられる発達の1つであり、今まで言われてきた体力・健康だけでなく、認知能力や情緒・社会性の発達にも重要であることを謳っている。また、その運動は単なる身体運動ではなく、身体活動を伴った「遊び」でなければならないことを強調している。

上述のように、幼稚園・保育園では「運動」の重要性は認知され、「運動」を積極的に行うようになってきたが、一般の子育て世代の保護者はいったいどうなのであろうか。子供の健全な発達のためには、幼稚園・保育園だけではなく、保護者の意識や行動が大事なのは言うまでもない。そこで本研究では、幼児期の子どもの体力に対し保護者がどれくらいの把握しているのかを明らかにしていくために、まずは「体力測定の結果の予測」に着目した。

2. 方法

静岡産業大学経営学部の子供スクールに通う3歳～6歳の幼児（43名：男児20名、女児23名）の保護者に、体力測定の結果についての予測を含むアンケートを事前に記入してもらい、実際の測定結果と比較した。体力測定の比較項目は表1に示す6種目である¹⁾。

表1 体力測定の項目

1. 25m走	4. ボール投げ
2. 握力	5. 反復横跳び
3. 立ち幅跳び	6. 体支持持続時間

この6種目は体力測定において全国のデータと比較されて5段階で評価される。保護者の予測アンケートもこれに倣いのように各種目に対して5段階で予測してもらった（表2）。体力測定の評価（結果）は、幼児体力測定プログラムにより5段階評価を行い、それを「実際の測定結果」とした。

- そのアンケートにおける「保護者の予測」値と「実際の測定結果」を基に以下を行った。
- ・「保護者の予測」と「実際の測定結果」の平均値と標準偏差
 - ・「保護者の予測」と「実際の測定結果」の平均の差の検討
 - ・「実際の測定結果」の平均と全国平均との差の検討
 - ・「保護者の予測」の平均と全国平均（体力測定の結果）との差の検討
 - ・「保護者の予測」と「実際の測定結果」の相関

表2 保護者の子どもの体力に対する予測選択肢

5：高い
4：やや高い
3：ふつう
2：やや低い
1：低い

¹⁾ 幼児の体力測定には柔軟性を測る「長座体前屈」も含まれるが、体力要素が他と比べて特異であるため今回は除外した。

3. 「保護者の予測」と「実際の測地結果」の平均値の差

まずはじめに、幼児の体力測定における「保護者の予測」と「実際の測定結果」それぞれの平均値および標準偏差を表3に示す。その結果、平均値はすべてにおいて「保護者の予測」を「実際の測定結果」が上回った。

表3の平均値の差が有意なものかどうか、ウィルコクソンのT検定により平均値の差の検定を行った結果、「体支持持続時間」と「ボール投げ」では有意差がなく、それを除く4種目（「25m走」「握力」「立ち幅跳び」「ボール投げ」）で「保護者の予測」よりも「実際の測定結果」が有意に高い値となった（表4）。

表3 「保護者の予測」と「実際の測定結果」の平均値および標準偏差

種目	保護者の予測		実際の測定結果	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1. 25m走	2.814	0.88	3.744	1.292
2. 握力	2.535	0.855	3.442	1.076
3. 立ち幅跳び	2.721	0.766	4.163	1.132
4. ボール投げ	2.767	0.841	2.837	0.814
5. 反復横跳び	2.535	0.735	3.256	0.79
6. 体支持持続時間	2.488	0.703	2.512	0.551

4. 全国平均との比較

今回測定対象となった幼児グループの体力測定の結果の平均と、体力測定の評価基準となっている全国体力測定の平均との差を検討した（表5）。その結果、今回対象としたグループの体力は「ボール投げ」においては平均的、「体支持持続時間」においては平均より有意に低い結果となり、残りの4種目においては平均より有意に高いことがわかった。

また、「保護者の予測」についても同様に「全国平均」と比較した。「保護者の予測」そのものの全国平均値やデータが存在しないため、ここでは表5と同様に、幼児の体力の全国平均のデータとの比較を行った。つまりここでの比較は「対象の保護者グループが、全

表4 「保護者の予測」と「実際の測定結果」の平均値の差

M：中央値、T：順位総和、z：統計量

種目	保護者の予測		実際の測定結果		z	P	有意差
	M	T	M	T			
1. 25m走	3	121	4	161	4.045	P<0.01	あり
2. 握力	3	109	3	148	4.546	P<0.01	あり
3. 立ち幅跳び	3	117	5	179	5.711	P<0.01	あり
4. ボール投げ	3	119	3	122	0.9	P=0.184	なし
5. 反復横跳び	3	109	3	140	4.528	P<0.01	あり
6. 体支持持続時間	3	107	2	108	1.461	P=0.072	なし

表5 「実際の測定結果」と全国平均との比較

M：平均値、SD：標準偏差、ES：効果量、*：p<0.05（両側検定）

種目	M	SD	t*	p	ES	有意差
1. 25m走	3.744	1.292	3.77	p<0.01	0.58	あり（平均値より高い）
2. 握力	3.442	1.076	2.69	p=0.01	0.41	あり（平均値より高い）
3. 立ち幅跳び	4.163	1.132	6.73	p<0.01	1.02	あり（平均値より高い）
4. ボール投げ	2.837	0.814	-1.31	p=0.197	0.2	なし
5. 反復横跳び	3.256	0.79	2.12	p=0.04	0.32	あり（平均値より高い）
6. 体支持持続時間	2.512	0.551	-5.81	p<0.01	0.88	あり（平均値より低い）

表6 「保護者の予測」と全国平均との比較

M：平均値、SD：標準偏差、ES：効果量、*：p<0.05（両側検定）

種目	M	SD	t*	p	ES	有意差
1. 25m走	2.814	0.88	-1.38	p=0.17	0.57	なし
2. 握力	2.535	0.855	-3.57	p<0.01	0.54	あり（平均値より低い）
3. 立ち幅跳び	2.721	0.766	-2.39	p=0.02	0.36	あり（平均値より低い）
4. ボール投げ	2.767	0.841	-1.81	p=0.07	0.28	なし
5. 反復横跳び	2.535	0.735	-4.14	p<0.01	0.63	あり（平均値より低い）
6. 体支持持続時間	2.488	0.703	-4.77	p<0.01	0.73	あり（平均値より低い）

国の保護者の平均と比べてどうか」というものではなく、「この保護者グループは、対象となった幼児グループを全国と比較してどのようなレベルだと予測しているか」を示すものである。

その結果、「25m走」と「ボール投げ」においては平均的だと予測し、そのほかの4種目（「握力」「立ち幅跳び」「反復横跳び」「体支持持続時間」）においては平均より低いと予測し

ていたことがうかがえる（表6）。

5. 相関

「保護者の予測」と「実際の測定結果」との一致度をスピアマンの順位相関係数により検討した。その結果、「25m」「握力」「ボール投げ」において有意な高い関連がみられ、「立ち幅跳び」「反復横跳び」「体支持持続時」において有意な中程度の関連がみられた（表7）。

また、種目のカテゴリを取り払い、すべてのデータを用いての検討も行ったが、結果は「rs=0.873, p<0.01」であり、有意な高い関連であった。

表7 「保護者の予測」と「実際の測定結果」との相関

rs：順位相関係数

種目	rs	p
1. 25m走	0.877	p<0.01
2. 握力	0.895	p<0.01
3. 立ち幅跳び	0.777	p<0.01
4. ボール投げ	0.824	p<0.01
5. 反復横跳び	0.759	p<0.01
6. 体支持持続時間	0.789	p<0.01

6. 考察

以上、幼児の体力測定における「保護者の予測」と「実際の測定結果」との関係について調べてきた。その結果を簡単にまとめたものを表8に示す。

「保護者の予測」は、「平均的」と予測した種目が6種目中2種目（25m走、ボール投げ）、「低い」と予測した種目が4種目（握力、立ち幅跳び、反復横跳び、体支持持続時間）であり、対象グループを総じて低く予測していた。これはグループの特性にもよるものかもしれない。つまり静岡産業大学のキッズスクールは、いろんな運動遊びを行うもので、特定の競技を行うようなスクールではなく、運動が得意な子も苦手な子も、みんなで楽しく遊ぶことを目標に行っている。そのため、保護者の参

加動機の中には「運動が苦手だけど、運動は好きなので、運動が苦手でも楽しめるからこのスクールに参加している」といったものや「運動がそこまで得意ではないので、サッカーや体操クラブなどは少し躊躇する」といった類のコメントがよく聞かれる。そのような意識を持つ保護者が比較的多いスクールであることが、「保護者の予測」がやや低くなった一つの背景なのではないかと思われる。

また、こういった運動遊びのスクールに通うということは、おおよそ運動への意識つまり「子供に運動やスポーツをさせたい」という意識は低くないと推察される。保護者が運動が得意であったり、ニュースなどでの「最近の子どもは体力が低い」という情報に影響されているなどを背景にして、保護者が自分の子どもの頃との比較で、我が子の体力が低いと感じていることも理由として考えられるのではないだろうか。実際、保護者が運動が得意かどうかを同時にアンケートをした結果、母親は「得意：14%」「やや得意：58%」「やや苦手：14%」「苦手：14%」、父親は「得意：50%」「やや得意：38%」「やや苦手：8%」「苦手：5%」であり、母親は72%が運動得意、父親は88%が運動得意と運動が得意な保護者が大半であった。これで上記の推測がやや裏づけられるように思えるが保護者へのアンケートで「お子さんは運動が得意か」といった大きなくくりでの間に対する回答を見ると「得意：34%」「やや得意：41%」「やや苦手：21%」「苦手：3%」となり、少し矛盾を感じる。

そこで、「お子さんは運動が得意か」の回答

表8 「保護者の予測」と「実際の測定結果」との関係まとめ

種目	平均値			予測と結果の相関関係
	A 保護者の予測 (全国と比較して)	AとBの 有意差	B 実際の測定結果 (全国と比較して)	
1. 25m走	平均的	<	高い	高い関連
2. 握力	低い	<	高い	高い関連
3. 立ち幅跳び	低い	<	高い	中程度の関連
4. ボール投げ	平均的	=	平均的	高い関連
5. 反復横跳び	低い	<	高い	中程度の関連
6. 体支持持続時間	低い	=	低い	中程度の関連

と「実際の測定結果」との相関を検討した結果「 $r_s=0.93$, $p<0.01$ 」と有意な高い相関を示した。また「保護者の予測」が平均だった種目と低く予測された種目を見てみると、低く予測された4種目のうち「反復横跳び」「体支持持続時間」の2種目は、日常生活ではなじみのないものであるし、「握力」は目に見えないので、手をつないだりする我が子のことは分かっても、それがほかのこと比べてどうかということがわからないものである。反対に、平均的と予測された「25m走」「ボール投げ」は日常的にも行われる動作が含まれており、かつ一般の大人から見ても運動能力として意識しやすい種目である。

ここで、子どもの「実際の測定結果」に目を向けると、「ボール投げ」が平均的で、「25m走」、「握力」、「立ち幅跳び」、「反復横跳び」は平均より高く、平均より低いものは「体支持持続時間」のみであった。つまり全体的に全国の平均より結果の良いグループであったといえる。これは「保護者の予測」とはずれていたことは表5より明らかであるが、前述した保護者への「お子さんは運動が得意か」の応え「得意：75%」「苦手：24%」という回答とは矛盾しない。

以上のことから、「保護者の予測」が低くなったのは、測定の種目が日常でないためにイメージがしにくかったり、やったことがないから低いだろうと予測した結果であると示唆される。「保護者の予測」のアンケートには、任意で「なぜそう思うのか」という項目があるが、低く予測した項目の中には実際にいくつか「やったことないから」というコメントがあったことを補足しておく。

それを踏まえて、「保護者の予測」と「実際の測定結果」および「お子さんは運動が得意か」の回答との間で相関が高いことを考えると、保護者は子どもの体力の傾向についておよそ理解していたと言つてよいと考えられる。しかしながら、体力測定の予測については、測定種目への認知度や経験値の有無により結果を低く予測する傾向があることが示唆された。

今回はスポーツスクールへの参加者が対象

であったため、より運動への意識が高い保護者が多かった可能性もある。幼稚園・保育園では、過大評価している保護者が多いとも聞かれる。今後は幼稚園・保育園など運動への参加意識にばらつきのある対象者などでも検証していく必要がある。

7. まとめ

本研究では、幼児の体力測定において、「保護者の予測」と「実際の測定結果」がどのような関係にあるかを明らかにすることによって保護者の子どもの体力への理解がどれくらいであるかを見ることを試みた。

その結果、保護者は子どもの体力についておおよそ理解でているが、体力測定の結果への予測については測定種目の特性に影響を受けることが示唆された。

【引用文献・参考文献】

- 文部科学省『平成15年度体力・運動能力調査報告書』2004
- 文部科学省幼児期運動指針策定委員会『幼児期運動指針ガイドブック』2012
- 福富恵介、春日晃章「保護者の子どもに対する体力評価と実際の体力レベルの一致度」日本体育学会大会予稿集、62号、2012、p182
- 出村慎一『健康・スポーツ科学のためのExcelによる統計解析入門』杏林書院、平成21年(2009年)
- 宮下充正『子どもの時の運動が一生の身体を作る』明和出版、2012
- 出村友寛「幼児の体力測定結果や運動遊びの取り組み報告が保護者の意識や行動に及ぼす影響」仁愛女子短期大学研究紀要、47、2015、p39-44
- 出村友寛「幼児の体力測定結果を定期的に報告することが保護者の意識に及ぼす影響」日本体育学会大会予稿集、65、2014、p212
- 伊藤秀志「遊びの相手や内容が幼児の体力・運動能力に及ぼす影響について」体力科学、56(6)、2007、p705
- 杉原隆、森司朗、吉田伊津美「幼児の運動能力発達の年次推移(2002、1997、198年)と運

動能力発達に関与する環境要因の構造的分
析」平成14～15年度文部科学省
子どものからだと心・連絡会議『子どものか
らだと心白書2016』2016